



3152
6

九十九日

本邦水滸傳巻之六

第十一條

守款が案罪とゆふされ之流麻呂金麻呂があとと

返ふ流麻呂妻子金石獵野に逢ひて紀伊の玉子乃

流麻呂とて之をよき之遊去より罪にせしむる。その家と壞され。妻子とハ

追放されぬ。又刑款省より彼獄屋に禁切せし守款をもと流の湯にいひこ

むせむ。刑責らしむ。曰。汝も給る首乃か。汝持く。うら。之の友人と首あり

る。にがひおお罪人を也。加つて金麻呂に賄賂せられ。流麻呂をせしむる。か

る。刑の台にやせ。さむくハ獄屋の棟にさかさまにたつ。瓜さぬき。流麻呂を

刑罰ハ列木の宮乃。爾また之ん。刑罰のよき。と懲せ。守款亦色ハ。あやう

もまぐ。弟ハ。飛立ち。をうりに。あやひ。はぐ。罪。つ。あ。う。て。あ。ぐ。く。え。い。え



大用之并専 卷之六

びもやぐせとて責れば。傳平のこゝろ異仲成りし。ぬくにやつぐらハ
 欺伏あまひをばひ中ひ。ちかむつさかりのがあるもぐ死や。さうはさるゆあり。さうも
 一人二人乃あまもゆび。いづれもたカハ佩ア火公り。ちろ中くに瓶かしくを
 ともえらうらもどらん。まは只さるあひもともどひ。皆く乃人の眼まかけて
 ともらう入に血ちもしく。きつろ勝むも汚穢きたるけに引ちろ。せとみるのハ嘔せぐ
 侍り。またぐび。ゆうハ使世金麻呂が家につふされ奈久こせ時の方より人本
 アもきるほ穢きたるけむらんとせ加伏拂すくはんともおがえび。又迷才いとこもも沫かぐ死よ。彼
 ホぐ死骸かづねととりかへもはおと。さうハ奈久こせうう入に死骸り。流りてとせむ。首の
 骸こはけは化り。ハええび。彼ホウは獲とくちちりて死するよ。またぐび。かあもく
 あうぬひのえぐら。銭くともハ瓶にまどはされてまぶる。さう入ハ罪刑舞

のひハいさまたかうりたてまつるとも。一巻もあうひむねなせむとち
 に。秘ひよさるゆありとて。一冊は千里まよひたかかんだきさる。誘つり引きあせとにやの
 ざのせ。只一冊よひたかかり。金麻呂が家乃ちりままは。はぐらせとまきこゆる
 に。書誌しようけぬりせや。観みさうちつろして走来あせあり。が二冊あありして地使つちゆ
 夜けやと踏ふちろ。誘つりぐへてちまき。直ただま金麻呂が家に系かりまに。ひをかげむ
 さぐ。オハはせまきゆ。今これハ家ハ一人も彫く。もとより死骸もゆび。
 血ちれこのかれさるおもくはかしくおかしくおひて。家の隅すみかみへに。ゆに
 引ひねりる紙しの風を吹ちろ。おま。二枚三枚拾ひろひぬ。かたりのあ。あか
 もまぶ。びとちし。おの宿人まゆ眉まゆをらつら。あや。のひやと。その紙しを完
 くみま。後あひ影かげやぐりくうら。かたし。もまぐ。もあう。又またをはなとて。教しゆ

なる所^かも有り。これをみよむたのく首^かはらひ。そとく首^かをた底^かに^か合^かくこれ^か人の^かか^かつ^かなりぬるに。人^かの^か決^かう^かち^かる^か。これ^かは^か巨^か勢^か金^か麻^か呂^かが^か画^かする^か中^かへ^か。金^か麻^か呂^かが^か書^か察^かに^かさ^かむ^から^かひ^かと^か死^か。此^かの^か放^か約^かを^かか^かせた^から^かひ^かる^かに^かの^か好^かけ^か約^か款^かど^かに^かお^かく^か。所^かを^かの^か杖^かを^か嚙^かわ^かして^かさ^かむ^かひ^から^かる^かあり。是^かか^かる^かび^か彼^かが^か宗^かの^か律^かは^かい^かれる^かは^かあり。げ^かな^かみ^かく^かの^かど^か死^かみ^かわれ^かど^か私^かは^かう^かけ^かぬ^かり^か抄^かべ^かお^から^かび^か奏^かした^かこ^かみ^かと^か奏^かなり^かる^か。乃^か院^か所^か傍^かに^か改^かま^かさ^かく^か。我^か子^かが^かり^かて^か牛^か表^か大^か井^か乃^か二人^かを^か依^か殺^かした^から^か。これ^かも^か金^か麻^か呂^かが^か宗^かに^かあ^かび^かる^かなり。よ^かし^か金^か麻^か呂^かを^か捕^から^かる^かれ^か。清^か麻^か呂^かを^か縛^かり^か來^かれ^か。此^かの^か奴^から^かとい^かう^かい^かかり^かて^か又^か天^か皇^か圖^かめ^かく^か。清^か麻^か呂^かハ^か提^か刀^か犯^かす^か處^から^かなる^か。金^か麻^か呂^かハ^か眼^か志^か

ひぬへ^かと^か常^かを^か女^かし。私^かは^か傍^かか^かた^かま^かひ^か割^か罪^か人^かと^かも^かに^か公^かを^かあ^かむ^かた^かる^かその^か罪^か徒^か圖^かつ^か罪^かは^かあ^かえ^かる^か。若^か河^か川^か拂^かひ^かて^かも^かの^かか^かれ^かど^かを^から^かと^かあ^かよ^か。此^かの^か指^かして^かも^かの^かま^かみ^かか^かひ^か志^かれ^かど^か天^かの^か所^かけ^かし^かい^かと^かあ^か死^かす^か。百^か官^かを^かか^から^かし^か。所^か乃^か理^かを^かき^かこ^かえ^か。げ^かなり^かく^か。刑^か官^か人^かの^かり^かど^か。守^か約^かが^か事^かの^か罪^か徒^かゆ^から^かむ^か。さ^から^かう^かハ^か令^かに^かお^かけ^かく^か。金^か麻^か呂^かは^か清^か麻^か呂^かと^かあ^から^かる^かれ^かて^か。此^かの^か罪^か徒^か返^かさ^かせ^かる^か。守^か約^か未^かか^かと^かあり^かと^かヤ^かあ^から^かる^かと^か。今^か志^かを^かと^か呼^かか^から^かし^か。金^か麻^か呂^かを^か捕^かへ^から^かば^か。ま^かづ^かの^か捕^から^かる^かを^か罪^か徒^かか^かけ^か。志^かを^か檢^から^かば^か。清^か麻^か呂^か乃^か人^かの^かま^から^かか^か。その^か分^か別^かは^かたら^かど^かる^かま^かづ^かん^かい^かと^かげ^か守^か約^か。此^かの^か罪^か徒^かを^から^かむ^かの^かひ^かき^かか^かせて^から^かる^か人^か。守^か約^か未^かか^から^かた^かめ^かあ^かひ^かて^か。金^か麻^か呂^かを^か捕^から^かる^かひ^かと^かあ^から^かす^かハ^か捕^かと^か捕^かを^から^から^かる^かか^かん^か。其^か具^かこれ^かは^かさ^かび^かと^かば^か



我せむびぞこそ乃ゆきくに勢ひくひとりなふあえんか。

小松のさとり

あまもの紀方にけりらあまのふと新振集の母とていつ

このひるぐさみくおんひるま。日も西のよづれば。あつれくさるぐさあまのせん
とくちみ推たのふに飯いひ炊ひきり。飯かたのふあまのたふを返かへらちのづら。揚ありたれは
あじ吟うたひあつなりなよ。いとあかおかしら。いづくつれまどいそまお別
あはくが原はら意いの岸がしはやどとせまうん。今いま二里にりをかりとちゆのみあつ。金を
あくあつくいあいのまづま。やとりやののひくひくくややままううせせななううんん。かくかく雲くも霧きりははててハ
いどいもも日ひままどどままままののドドキキにに。積つくく肩かたひひををううもも。ささ人ひと里りハハ初はつたたうう。ははううん
とくとどどああううかかよよおおををせせババ。テテ人ひとがが二に言ことををおおひひああせせくく。はは細これれななををままああまま

端はたたけけくく春はるををたたななどどいいつつにに。秋あきののままおおれれがが秋あき乃のののとといいははれれ。後あと

ちかく指さささひひびび。ままのの者ものももどどいいゆゆののりりとと。けけ先さきととももままええびび夕ゆ霧きり乃のままかからら一
たたるるにに。いいととくくいいわわききくくおおががここうう。意い飯いひととふふかか方かたににかかりりくく。若わかままささううええたたるる乃の
へへにに春はるががおおうう一一ままりりくく。むむししらら若わか飯いひどどかかきき拂はらひひ。ままままううせせままああるるせせららにに。
ままままれれむむひひととままままひひぬぬららよよ。着き着きああるる。ままままううせせののううつつももままままひひ。
ああおおどどほほくくおおやや。父ちち弟あにああどどままああううままるるにに。ままままうう一一ままままううななままののああままううぬ
れれがが。おおももねねんんどどららよよ。はは飯いひここええれれババ。おおややどどりりハハををかかええ。いいぞぞいいそそががんんとと又また
肩かたひひななららんんととままるるにに。飯いひののままををかりりのの臣おみのの木き乃のいいとと大おほききややりりとと。ああままううくく
ううちちななれれ方かたととありり。ままハハ七しち天てんををかりりのの言ことのの男おとこのの八やち木き乃の飯いひとと一一傳つたへへよよととま
我われれととつつれれくく。おおひひととううままららととみみ。がが。又また海うみののいいややままううりりととううままああるる乃のととも

さらねるくまをたり

第十二條

山越渡林兵の妻子をぬき去る所を尋ねて書大を力

金をよきふ并に祀存の人へ祈りていれ

君をいど世をろくちがさうちのねたあや。金の糺野かまをさう
あれどもが依り存のまをり心せられく。後めくそえられど。後方子もく
が。横ざまはも任せがく。志をうたづめ。男お杖と志が移まつ死
し。神八ひろくねえ。首八首ありさう。さうまがりてたさうきり。
あまびこさう。吼さう。はくい。おまよ。あおか。ぬら。たさう。たよ。
女さお。く。ら。く。さ。う。ゆ。く。さ。さ。う。の。う。わ。ら。の。う。あ。た。さ。あ。で。お。さ。り

て世んといふ。金の糺野をなくさう。弱より強よと対んとつよさう。まは
か。下。け。ね。き。我。く。ハ。故。の。い。こ。が。押。と。さ。う。い。て。は。に。臣。家。さ。ま。ら。ん。と。い。は。れ。は。い
て。信。の。故。の。信。方。に。さ。う。べ。の。あ。が。さ。や。や。ま。ち。か。の。その。所。の。よ。を。さ。く。も。あ。び。さ。
の。ま。ふ。ハ。ら。の。人。ぞ。と。い。ふ。さ。さ。う。の。故。の。女。女。お。と。ま。あ。ら。か。さ。乃。浦。の。接。女。
まつたあさ。浅と深をさう。我くが家業あり。さうと我くへ弘もせぬ。さうら
もねく。海が深さむとさるか。又我くが君とせんといわ。そも秋ハむ。金
に魂きくせし。大徳の神乃子孫まく。楚甲山乃神。楚又の命ハ長。長との
御。この男ハ怨鳥の神乃子孫まく。八鬼山乃山鳥又の命ハ。命をさむ。
さハく。極くも。命ハ。さ。い。の。ひ。の。命。あり。小。ま。ま。その。見。お。神。神。に。貢。命。を
神よさうあかれ。さう。ハ。命。と。ハ。神。あり。遊。あ。さ。む。は。徳。松。乃。秋。と。え。ん。小。平。藤



本朝水滸傳 卷之六

いふをかりもれくまきとせん。人おれやくといのりくね。木の根跡踏むら
し。あは端さるるまねどしとちかくされ。どそれと勢ゆよ。何よかあしんさ
負せくひさごまにのびく。またおれとわひくはどさよ。あは板のい
るみるんれんがまのゆあみさるとまはくと。都風俗ようしひてまのちりみり
け。そも碓やこれ八島の身もあひび山の橋まが務射さるるんぬもわやく
あれこそそ中とひとりごちていひさるゆ。あむと久八かたりしと。人あそ
われとくはくくちみびえ八塞よ。橋まが痛矢岸よ。あよりたるがいて
かんといあるま。さあハ粟おりく。負せよれば。何まわくせびとて又いと。
あつのみあふちち務射のにすくねてい人あり。そハ明日香の大木力あひや。
はるさのたまハ巨勢のかといひもてそひ。さハいれねち。けりりさあや

としておくは。おくくのうとせられ。あつちりてハおれがうへも。柱が死むひら
す。おれおくちのりねん。又橋まが死骸ハ今とてまあむりせね橋もさるぬを。
指のまといねびく。そあはとく。おれどうちかとい死骸ゆさあ。利澄
か。楚押きり。弟利とく。火を燈おして火つけく。橋よ。山吹のりく
燈のいさくたさ。我ハ粟ゆあひちよハ金石とまあせく。足搔ゆちるや
めく。ゆくく金屋の流りく。おれ今ハ死侍の山道にまらども。明日香ゆも
て家の名ゆふハおれ。乃由家乃由ゆ忘れまらトとまると毒くハ知ゆふ
ま。我仕事血氣よまの。鋭物まのくまをありちゆり。陰とつういお撲
とあのみひりて。農業と忘れさるゆ。徳と我父形多川左我と悲ひを
ちくゆよ。せよゆる父を罪とた。公は捕へうこれ。獄をいつるふれてゆりし

大目録 卷之六

二二ツミ

ヒトマ

と。徳麻呂の御執事等の内なり。いと金座をさへせんと。此の御座のえはげふ
にありとて。幸徴をせられた。大初の間と述敷けしゆ。されど一たびは救えんと
こひなりて。本個にゆり。御へは急討つふまゝとせしむるなり。秋久一く
は山に信せめハモトツクニ徳山むら特中ムラヒどののありけるものより。又ええてはたはたを一時よ
とあり。徳麻呂はせし人々とはハの死志のせせをせん。まよりるまのゆゆへ
かとおをんと。かろくゆふ。秋とくれはとゆへく。徳麻呂つく。時ハ秋を
かりにあらん。金麻呂かかれあふいさう。大志刀金麻呂か死せりし。たと
つおよろちた死く。金麻呂ゆりゆいぬといふ。信ハハとくおまどひて。まづ斬るど
おかく一といふとゆふ。金麻呂ハハみたる人々。まよりのりて山坂を越するに。
今ハ初のゆりく。相もいひぬ。大志刀ハ又徳麻呂のゆあり。まよゆみかより。ゆを

こめかゆりく。ゆふ。徳麻呂とやくそれとみあひく。こハいかまこのまよ。まよ金麻
呂ハ業をいふ。大志刀はかろくせまのりたる。始末。又まつるもの秋乃ささり
乃わらま。おまをうをくれり。まろの幸よく。信ハハ直よ。信ハハ直よ。信ハハ直よ。
とあり。まろといふは。徳麻呂たぐ世の中乃まかせさるゆり。信ハハ直よ。信ハハ直よ。
おまのおまの妻あやはゆきひゆり。まろ金麻呂痛を看病よ。信ハハ直よ。信ハハ直よ。
まろヤさん秋の退ひゆ。せまれのいぞか。信ハハ直よ。信ハハ直よ。信ハハ直よ。
の志をせん。ゆふとせまろくよ。せまれのいぞか。信ハハ直よ。信ハハ直よ。信ハハ直よ。
とゆふ。ゆふのいぞか。信ハハ直よ。信ハハ直よ。信ハハ直よ。信ハハ直よ。信ハハ直よ。
ども。これハまろのゆゆとわらん。父とまろの母ハまろのいぞか。信ハハ直よ。信ハハ直よ。
とくまろのゆゆのかれま。まろのゆゆとわらん。父とまろの母ハまろのいぞか。信ハハ直よ。信ハハ直よ。

破りく入る人八道首は足有り。浪蕨長く面あつてはる。髪の中乃人子か現
 まらうと。三尾を勝乃さらばは押務ありとも。火の中はまきれまひいさ焼た
 れる首をて佐保の川をにまきうらひひ火がくそははよあかふかやとあひさ
 まはは三尾を火の我ハ押務おむひひりくたあひく退火が子祖まの
 出伏はり。侍伏山乃やとまぐあうしに。別押務が鬼のまあは。こゝあろ
 浪蕨のゆえ入く死ぬと承りしが。今ハ白狼老人とあれはく。侍伏山ははれ
 てゆよ。おまめりあひ。そよあろく祖まもそこよ志のげせなり。押務を
 めおれらハ。かく大改官の名は懐す。同志の人をかさひ。あつてはと封
 んの侍おひひけくひ。かへりハは身のうちも。金蔵長のうちもいとせきり
 てまらう。我は侍やとくさひに侍伏山に居るまらうせん。又金蔵の面あたる人あ

らぬよ。おれが身まきくゆといひやう。我あを。旅田火の間。おれおしや
 おれまむらあときまをたかバ。ばあの人ちりあやみまをらん。さるはひごよ湯よ
 ひぢく。侍ごよまはは妻子乃はたりとあまあふ。そを大志力ハカ自若お姫君
 の出方さりとあ。はあひまあ。せよをあうへま。びをかよ進ははよはとも
 ありく。侍伏山のやうとよは麻呂とあやの乃おはり。そよよいらうてははは
 とい。まあがかれおまのやうなまか。やちんはそ時うつらぬ。やはは依中
 さんといあま。へくちあまのむおよい。やとくあひく。金石おま。おまを
 てかひりく。そちやくくおあひ。せんまをるんは。大志力にむくひ。我あも
 押たんまるとはあもねん。まあはもして進ひつらん。おまがおまの浦
 さまとくゆく。はまおまを。おまのと火山。おまもが洞のまらう。ま。加あ

浦をときとえつるのあり。あうむゆまるといふ。飛鳥の天を^{こせ}。巨^{まろせ}のた谷
そりよゆのむむたつとらひくあぬ。おほいあやうた藤人乃はまやう。よろうの
金をよひひゆたてくあぬ。

おれあ解付き之とれ

